

俳優ってなんだろう。これから演劇状況はどう変わっていくんだろう。新しい世界と関わってゆけるのは一体どんな演劇的言語だろう。いっしょに思いをめぐらせながら、「演劇的なもの」を探す旅をしませんか。でも、なぜ松本なのか。あなたの家族や友だちは不思議がるかもしれません。松本の市街は洗練されていて、土地柄、人柄が素晴らしいのはたしかです。

しかしぼくが考える理由は、そのローカル性ではありません。むしろ世界とつながる文化拠点として可能性に満ちた街だからです。ここには「日常的不在」を「劇的存在」に変える環境があります。ときおり東京の日常生活には、そこにいるのに存在を実感できない「不在の感覚」が蔓延してはいないでしょうか。「まつもと演劇工場 NEXT」には、俳優にとって大切な「そこにいる」というテーマに日々立ち向かわせてくれる人がいて、仲間がいて、環境があります。1期生が経験したカリキュラムは「学ぶ」と「創る」が一体となった俳優養成の広場でした。

いま、稽古場は旧保育園です。かつて子どもたちが想像力の限りを尽くした、遊戯の魂を宿した空間です。そこにさまざまな演劇人がやって来て、基礎ワークと実践を繰り返すのです。前期の半年間に授業を担当した講師陣の顔ぶれを見てみてください。たとえば3月には串田和美芸術監督を中心とした長期間ワークショップがあり、観客を迎えての発表会もしました。7月には加藤直工場長を演出家として自主公演が行われます。おそらく2期生についても基本スタイルは踏襲されるでしょう。けれども、あなたが新たな工場生として、そこにいることで、広場の遊戯法は変わってゆくはずです。それが演劇的变化というものです。子どもにとって遊戯が「仕事」だったように、演劇に没頭できる環境に身を置けることはそれ自体が才能です。あなたがいまその才能を発揮できるとしたら、松本でいっしょに、演劇的なものを探す旅をしましょう。

木内 宏昌

(まつもと演劇工場・講師／演出家、翻訳家、劇作家)